

JES NEWS

日本評価学会学会報第1号

【発行日】2021年10月10日

【編集】出版・広報委員会〔南島和久、
上野宏、佐藤徹、賛川信幸、湯
浅孝康、新藤健太、小室雪野〕

【発行責任者】南島和久

jes.info@evaluationjp.org

Contents

| | | |
|----------------------|-------|----|
| I 日本評価学会の「魅力発信」の強化を！ | 大島 巖 | 1 |
| II 第75回理事会報告 | 事務局 | 2 |
| III 第28期評価士養成講座報告 | 研修委員会 | 3 |
| IV 『日本評価研究』の最新刊 | 編集委員会 | 4 |
| V 「第22回全国大会」のお知らせ | 企画委員会 | 5 |
| VI 春の分科会の報告 | 企画委員会 | 9 |
| VII 書籍の紹介 | 源 由理子 | 10 |
| VIII 評価の実践 | 米原 あき | 11 |
| | 三好 崇弘 | 12 |
| IX 編集後記 | 新藤 健太 | 13 |

I 日本評価学会の「魅力発信」の強化を！

日本評価学会会長・東北福祉大学副学長 大島 巖

この度、記念すべき「日本評価学会学会報(ニューズレター)」第1号の発行に当たり、このように巻頭言を執筆できることをとても嬉しく思います。

出版・広報委員会の活動の1つに「学会報(ニューズレター)の発行」が位置づけられておりましたが、これまで発行が実現できずにおりました。今回、南島出版・広報委員長と委員の皆さまのご尽力で、内容豊かな学会報第1号を発刊できますことに対して、心から感謝を申し上げます。

日本評価学会は、多様な学問領域を背景に成り立っており、加えて実践科学の学会として、研究者だけでなく実践家も幅広く学会活動に参加しています。

このような会員の多様性は本学会の特色であると共に、大きな魅力にもなっています。その魅力発信のために、さまざまな立場にある会員間の交流を積極的に図り、さらには、本学会の目的の1つである「広く一般市民に

対し評価活動の向上の評価の普及に寄与」を実現するためにも、学会そして各会員からの活発な情報発信は不可欠です。

この学会報(ニューズレター)の発刊は、今後、本学会の有効な広報媒体になることを期待しております。

ところで私と評価学会との最初の出会いは、2001年11月にアメリカ・セントルイスで開催されたアメリカ評価学会(AEA)大会への参加でした。在外研究でアメリカに滞在していた折に初めて参加しましたが、多様な立場の会員がさまざまなテーマで、活発かつ熱心に討議する様子が圧倒されました。また初参加者のためのオリエンテーションセッションがあったり、評価学書籍の著名な著者たちと交流できる懇親会があったり、その友好的で



アットホームな雰囲気を目を見開かされる思いでした。

その大会に当時本学会理事をお務めだった長尾眞文先生が参加されており、先生から日本評価学会を紹介されて、その後本学会に参加するようになりました。このように私にとって、その後会員になり何度か継続的に参加を続けている AEA 大会は、私の原点のような存在と言えます。

翻って、AEA との比較で日本評価学会を見ると、会員規模の点で大きな差があるばかりではなく、会員間の交流やホームページやメーリングリストなどでの情報発信の面で、見習わなければならない点が数多くあるように思います。

私が日本評価学会会員を長年続けて来られたのは、評価学自体の魅力もさることながら、多様な学問的背景をもつ会員の皆さんと、「評価学」という共通の土俵でいっしょに議論ができ、それによって多くの新たな学びを得て、啓発されるという魅力があったからのように思います。

私たちが触れてきた「日本評価学会」の魅力を、もっと幅広く、「評価学」に関心をもつ全国の多くの関係者に伝えること、そして会員数を拡大することが、私たちの重

要な使命の 1 つと思っています。本学会の発展にとって、評価学会の「魅力発信」は、これから最大限、重視して行かなければならない事項と思っています。

『日本評価研究』最新号(21 巻 2 号)の巻頭言でも述べているように、現在、本学会理事会・常任理事会では、「学会の新たな発展に向けた基盤整備検討会」を設置し、学会運営の改革方針を定めようとしています。この改革によって学会運営を会員の主体的参加による、より活発で自律的なものにする、また開かれた学会運営を行うことにより、会員の皆さまのさまざまなご経験を活かして、相互交流が活発化することを目指しています。この改革が目指すさらに先の目標には、会員数の拡大があります。そのためにも、本学会の「魅力発信」は不可欠です。

評価学に関心をもつ多種多様な領域の、もっと多くの関係者が本学会に集い、積極的かつ活発に交流して、学会活動がさらに発展することを願ってやみません。そのためにも、この学会報(ニューズレター)を、会員の皆さまそれぞれが、積極的な原稿執筆などを通して、大切に育てて頂きますよう、心から願っております。

II 第 75 回理事会報告

2021 年 9 月 19 日(日)に第 75 回理事会が開催され、今次理事会では以下の審議事項について議論を交わしました。審議事項については、継続審議を除いてはすべて承認されました。

審議事項： 新規会員候補者の承認について、2021/2022 年度活動方針(案)について、役員選任規程改定(案)について、次期役員選挙スケジュール(案)について、全国大会実行委員会規程(案)について、2021 年 12 月の秋の全国大会のプログラム(案)について、評価士制

度の見直し(案)について(継続審議)、第 8 号議案 第 29 期評価士の認定について

報告事項： 退会者について、委員会報告(①編集委員会、②出版・広報委員会、③企画委員会、④国際交流委員会、⑤学会賞審査・倫理委員会、⑥研修委員会)、その他

Ⅲ 第 28 期評価士養成講座報告

2021 年 8 月～9 月に第 28 期評価士養成講座が開催されました。今期の評価士養成講座はオンデマンド&オンラインによる開催となり、30 名様参加を得ましたので、概要を添えてご報告します。

【対象】評価の専門的能力を身につけることを志向する方

【日程】◇講座 ①講義録画視聴 2021 年 8 月 16 日(月)～9 月 12 日(日)(期間限定)

②演習・質疑応答オンラインセッション(各講義 1 時間程度 演習は1時間半)

2021 年 8 月 22 日(日)、28 日(土)、29 日(日)、9 月 4 日(土)、5 日(日)

◇評価士認定試験 2021 年 9 月 12 日(日)* 講座修了者対象、希望者のみ。

| 『第 28 期評価士養成講座』プログラム | | | | | |
|----------------------------------|--|-------|--------------|---|--|
| 単元 | 講義名 | 講師名 | オンラインセッション日程 | | |
| | オリエンテーション、自己紹介 | 事務局 | 8/22 | 日 | 13:30-13:50 |
| 第 1 単元 講座の概要 と評価の基礎 | ① 講座の概要 評価の基本的考え方(1) 評価者倫理と評価者の社会的責任 | 今田克司 | 8/22 | 日 | 14:00-15:00 |
| | ② 評価の基本的考え方(2) | 津富宏 | 8/22 | 日 | 15:15-16:15 |
| 第 2 単元 プログラム 評価の基礎 と諸要素 | ③ プログラム評価の基礎と概要 | 大島巖 | 8/28 | 土 | 09:00-10:00 |
| | ④ プログラム評価の 5 階層 (ニーズ評価からセオリー評価) | 源由理子 | 8/28 | 土 | 10:30-12:00 演習 (グループ①) 13:00-14:30 演習 (グループ②) 14:45-15:45 質疑応答 (合同) |
| | ⑤ プログラム評価の 5 階層 (セオリー評価からプロセス評価) | 新藤健太 | 8/29 | 日 | 09:00-10:00 |
| | ⑥ プログラム評価の 5 階層 (インパクト評価) | 青柳恵太郎 | 8/29 | 日 | 11:30-12:30 |
| | ⑦ プログラム評価の 5 階層 (効率性評価) | 齊藤貴浩 | 8/29 | 日 | 10:15-11:15 |
| 第 3 単元 | ⑧ 業績測定 | 小野達也 | 8/29 | 日 | 13:30-14:30 |
| 第 4 単元 分析手法 | ⑨ データ収集・分析(定量的手法) | 佐々木亮 | 9/4 | 土 | 09:00-10:30 演習 |
| | ⑩ データ収集・分析(定性的手法) | 三好崇弘 | 9/4 | 土 | 11:00-12:30 演習 |
| 第 5 単元 | ⑪ 評価報告と活用 | 源由理子 | 9/4 | 土 | 13:30-14:30 |
| 第 6 単元 専門分野科 目 | ⑫ 日本の評価の現状レビュー | 山谷清志 | 9/4 | 土 | 14:45-15:30 |
| | ⑬ 大学評価の現状と課題 | 齊藤貴浩 | 9/4 | 土 | 15:45-16:30 |
| | ⑭ 学校評価の現状と課題 | 橋本昭彦 | 9/5 | 日 | 9:00-9:45 |
| | ⑮ 政府における政策評価の現状と課題 | 塚本壽雄 | 9/5 | 日 | 10:00-10:45 |
| | ⑯ ODA 評価の現状と課題 | 柳内将成 | 9/5 | 日 | 11:00-11:45 |
| | ⑰ NPO 評価の現状と課題 | 小林立明 | 9/5 | 日 | 12:00-12:45 |
| | 講座のおさらい | 今田克司 | 9/5 | 日 | 14:00-15:00 |

【第 29 期評価士養成講座のご案内】

次回の第 29 期評価士養成講座は、2022 年 2～3 月に、オンデマンド&オンラインによる開催を予定しております。

評価士養成講座ウェブサイト <http://evaluationjp.org/activity/training-pro.html>

IV 『日本評価研究』の最新刊

2021年9月に『日本評価研究』の最新刊が発行されました。今回は「持続可能開発目標の評価(SDGs)」という特集を組んでおります。

『日本評価研究』は、発行後速やかに会員のみなさまのお手元に届くよう手配しております。ただし、年会費未納の方には送付しておりませんので、もしお手元に届かないようでしたら学会事務局(jes.info@evaluationjp.org)まで会費の納入状況をご確認いただきますようお願い申し上げます。

また、ご所属が変更になった場合には学会事務局までご連絡をお願いいたします。ご所属の変更届は学会のホームページのトップにあります。

大学等の研究費を活用される場合には、大学によっては「大学名のみ」で納入されることもあります。この場合には事務局ではどなたさまからの入金かの判別がつかまないので、学会事務局までご連絡をいただきますようお願い申し上げます。



■もくじ

~~~~~  
巻頭言 評価学に関心をもつ多くの関係者が集い、活発に交流できる学会運営を旨として 大島 巖

### 特集:持続可能開発目標の評価(SDGs)

特集に寄せて「持続可能開発目標の評価(SDGs)」

林 薫

Evaluation Capacities to Advance Sustainable Development for All

Indran A. Naidoo

SDGsの時代における評価能力構築

村岡 敬一・日野 類子

SDG教育目標にみる理念志向ターゲットの評価に関する一考察:

測定可能性(measurability)から評価可能性(evaluability)へ

米原 あき

SDGs第7目標の評価

林 薫

DAC新評価基準の解釈と運用

江口 雅之

新規SDG事業構想時の評価活用:アフリカの次世代企業家育成事業の事例報告

長尾 眞文

### 研究ノート

プログラム評価の一類型としての「社会的インパクト評価」の課題と可能性

伊藤 健 玉村 雅敏 植野 準太

留学生30万人計画の成果と課題

—成長戦略、大学のグローバル化及び日本語教育との関係からの考察—

佐藤 由利子

実践的判断のプロセスとしての形成的アセスメント

—J.デューイの価値評価論をめぐって—

西塚 孝平

### 第22回全国大会のご案内

~~~~~  
日本評価学会では、「日本評価研究」掲載のための投稿原稿を募集しております。毎年の投稿の締め切りは9月末日(翌年3月刊行)及び3月末日(9月刊行)です。ご投稿をご希望の方は、投稿規定・執筆要領・査読要領、ならびに原稿見本を熟読のうえご投稿ください。みなさまの積極的なご投稿をお待ちしております。

学会誌ウェブサイト <http://evaluationjp.org/activity/journal.html#recruitment>

V 「第22回全国大会」のお知らせ

2021年12月4日(土)、5日(日)の日程で第22回全国大会をオンラインで開催します。大会のテーマは「不確実性時代の評価」です。ふるってご参加ください。

| 1日目(12月4日(土)) | | | |
|------------------------|--|--|---|
| | ルーム A | ルーム B | ルーム C |
| AM 9:30～ 11:30 | シンポジウム 「評価」に何ができて、何ができていないのか？～不確実性の時代への展望のために～ (田中啓) | | |
| 11:30～ 12:30 | 理事会 | | |
| PM1 12:50～ 14:50 | 共通論題 1 会計検査と評価 (田辺智子) | 共通論題 2 国際協力機構(JICA)の事業評価における最近の取り組み (佐藤洋史) | 自由論題 1 NPO/評価手法 (新藤健太) |
| PM2 15:00～ 17:00 | 自由論題 2 行政 (西山慶司) | 共通論題 3 (ラウンドテーブル) エビデンスの相互理解—EBPM、発展型評価、協働評価における位置づけと利用—(仮) (社会実験分科会) (佐々木亮) | 自由論題 3 教育 (佐々木保孝) |
| 2日目(12月5日(土)) | | | |
| | ルーム A | ルーム B | ルーム C |
| AM 9:30～ 11:30 | 共通論題 4 日本における協働型評価とNPO—政策 21 の軌跡— (山谷清志) | 自由論題 4 科学技術/国際協力 (白川展之) | 共通論題 5 IFI 国会設置に関する諸々の提案に関する評価と課題分析 (廣野良吉) |
| 11:40～ 12:40 | 総会 | | |
| PM1 12:50～ 14:50 | 共通論題 6 国の行政機関が行う評価の動向～総務省行政評価局における最近の取組～ (工藤文武) | | 共通論題 7 (ラウンドテーブル) 日本評価学会「評価士」制度のあり方に関する会員意見交換会(研修委員会) (今田克司) |
| PM2 15:00～ 17:00 | 共通論題 8 自治体の政策評価とEBPM (佐藤徹) | 共通論題 9 「協働」と「学び」に基づくSDGs時代の評価 (米原あき) | 共通論題 10 第6期科学技術基本計画と評価学 (白川展之) |

プログラム詳細（10月10日版）※当日のプログラムでは変更となる可能性があります。

| |
|---|
| 1日目（12月4日（土）） |
| AM 9:30～11:30 |
| ルーム A |
| シンポジウム 「評価」に何ができて、何ができていないのか？～不確実性の時代への展望のために～ 座長・司会：田中啓（静岡文化芸術大学） 開会挨拶：大島巖（東北福祉大学） 講演者：塚本壽雄（早稲田大学名誉教授、元総務省行政評価局長） 廣野良吉（日本評価学会顧問、成蹊大学名誉教授） 討論者：南島和久（龍谷大学） 石田洋子（広島大学） |
| 11:30～12:30 理事会 |
| PM1 12:50～14:50 |
| ルーム A |
| 共通論題1：会計検査と評価 座長：田辺智子（国立国会図書館） 司会：和川央（岩手県立大学） 討論者：田中啓（静岡文化芸術大学） ・東信男（会計検査院）「会計検査と政策評価－共通性と相違性－（仮題）」 ・益田直子（拓殖大学）「緊急事態下の各国 SAI の活動が示す検査機能への期待の変化について（仮題）」 ・田辺智子（国立国会図書館）「評価理論の観点から見た有効性検査（仮題）」 |
| ルーム B |
| 共通論題2：国際協力機構（JICA）の事業評価における最近の取り組み 座長：佐藤洋史（JICA） 討論者：正木朋也（JICA） ・鳴谷 哲（JICA）「JICA 事業評価の全体状況と最新課題」 ・伊月温子、今吉萌子、大川太郎（JICA）「開発協力における課題別事業戦略の強化及び評価上の検討課題」 ・石原和伊、松延香代、柳内将成（JICA）「Theory of Change（ToC）を通じたアウトカムの可視化」 ・柳内将成、今吉萌子、石原和伊、猿田幸絵（JICA）「JICA 事後評価基準改定の運用について ～Human well-being、Leave No One Behind を題材に～」 |
| ルーム C |
| 自由論題1：NPO/評価手法 座長：新藤健太（群馬医療福祉大学） 討論者：藤島薫（東京福祉大学） ・○猪俣加菜子（非営利組織評価センター）「NPO の組織運営～アドバンス評価から見てきたこと～」 ・○中谷美南子（CSO ネットワーク、チームやまびこ）「地域における文化・芸術活動をどう評価するか？発展的評価（DE）を通じた静岡県文化プログラムでの評価制度構築支援の実践」 ・○齊藤貴浩、川端亮（大阪大学）「大学教員の学術的活動についての社会における評価」 |
| PM2 15:00～17:00 |
| ルーム A |
| 自由論題2：行政 座長・討論者：西山慶司（山口大学） ・○岸本由梨枝（新見公立大学）「大学の地域貢献プログラムの公共政策としての評価の必要性」 |

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・○池田葉月（京都府立大学大学院）「業績測定による評価における指標の改善」 ・○橋本圭多（神戸学院大学）「コロナ禍におけるジェンダー予算の現状と課題」 |
| ルーム B |
| <p>共通論題 3（ラウンドテーブル）：エビデンスの相互理解－EBPM、発展型評価、協働評価における位置づけと利用－（仮）（社会実験分科会）</p> <p>座長：佐々木亮（国際開発センター）</p> <p>司会：田辺智子（国立国会図書館）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・EBPM：正木朋也（JICA） ・発展型評価：今田克司（CSO ネットワーク） ・協働評価：佐々木亮（国際開発センター） |
| ルーム C |
| <p>自由論題 3：教育</p> <p>座長・討論者：佐々木保孝（天理大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・○牟田博光（国際開発センター／大妻女子大学）「ミャンマー連邦共和国における教授言語と家庭言語の乖離問題を緩和する言語補助教員配置政策の評価研究」 ・○橋本昭彦（国立教育政策研究所）「学校評価のカスタマイズ手法の開発～評価ニーズ調査の中間報告～」 ・○江崎那留穂（愛知淑徳大学）、關谷武司（関西学院大学）、吉田夏帆（高崎経済大学） <p>「COVID-19 による大学遠隔授業の学習効果－遠隔授業導入直後との差異に着目して－」</p> |

| |
|---|
| 2 日目（12 月 5 日（土）） |
| AM 9:30～11:30 |
| ルーム A |
| <p>共通論題 4：日本における協働型評価と NPO—政策 21 の軌跡—</p> <p>座長：山谷清志（NPO 法人・政策 21）</p> <p>討論者：南島和久（龍谷大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鎌田徳幸（NPO 法人・政策 21）「岩手県における協働型評価の経緯・展開・課題」 ・岩渕公二（NPO 法人・政策 21）「盛岡市における指定管理者制度施設の第三者評価」 ・熊谷智義（NPO 法人・政策 21）「北上市の協働事業に関する第三者評価」 |
| ルーム B |
| <p>自由論題 4：科学技術/国際協力</p> <p>座長・討論者：白川展之（新潟大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・○高橋眞美（元早稲田大学大学院）「持続性の評価－評価方法と持続性－」 ・○三上真嗣（同志社大学大学院）「ODA 評価と国際科学技術協力－STI for SDGs と SATREPS の行政過程－」 ・○佐藤功一（JICA）「衛星データを活用したインフラ事業のインパクト評価～タイ「バンコク大量輸送網整備事業」を事例に～」 ・○吉岡佐知子、佐藤功一（JICA）「Google Earth Engine を用いた衛星データ分析の有用性と限界～タイ「バンコク大量輸送網整備事業」を事例に～」 |
| ルーム C |
| <p>共通論題 5：IFI 国会設置に関する諸々の提案に関する評価と課題分析</p> <p>座長：廣野良吉（成蹊大学）</p> <p>討論者：上野宏（国際開発センター）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題導入：廣野良吉（成蹊大学）「我が国における民主的統治機構の崩壊」（仮） ・清原剛（カーボンフリーコンサルティング）「IFI の必要性和設置プロセス」（仮） ・黒澤善行（政策工房）「IFI の国会設置実現に向けた取組み」（仮） ・吉川富夫（事業創造大学院大学）「事前評価の政治プロセス」（仮） |

| |
|---|
| 11:40～12:40 総会 |
| PM1 12:50～14:50 |
| ルーム A |
| <p>共通論題 6：国の行政機関が行う評価の動向～総務省行政評価局における最近の取組～</p> <p>座長・司会：工藤文武（総務省）</p> <p>討論者：深谷健（武蔵野大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・渡部貴徳（総務省）「政府における EBPM 推進の取組～EBPM の実証的共同研究を中心に～」 ・塩見雄介（総務省）「農業分野における災害復旧の迅速化に関する行政評価・監視」 ・柳木浩之（総務省）「新しい生活様式に対応した行政サービスの提供の在り方に関する調査」 |
| ルーム C |
| <p>共通論題 7（ラウンドテーブル）：日本評価学会「評価士」制度のあり方に関する会員意見交換会</p> <p>日本評価学会研修委員会</p> <p>青柳恵太郎、○今田克司（研修委員長）、小野達也、下園美保子、新藤健太、橋本昭彦、源由理子（五十音順）</p> |
| PM2 15:00～17:00 |
| ルーム A |
| <p>共通論題 8：自治体の政策評価と EBPM</p> <p>座長：佐藤徹（高崎経済大学）</p> <p>討論者：小野達也（鳥取大学）</p> <p>発表者（五十音順）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飯田 洋市（公立諏訪東京理科大学）「予算編成に向けた市民参画型事前評価の手法の研究～長野県岡谷市商業活性化計画を事例にして～」 ・後藤玲子（茨城大学）「自治体 EBPM と 3 つのバイアス」 ・和川央（岩手県立大学）「KPI を活用した将来シミュレーションによる政策立案の検討～政策提言 AI システムの活用を通じて」 |
| ルーム B |
| <p>共通論題 9：「協働」と「学び」に基づく SDGs 時代の評価</p> <p>座長：米原あき（東洋大学）「趣旨説明：SDGs 時代の評価を考える～価値を引き出す評価とその仕組み～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・佐藤 真久（東京都市大学）「順応的協働ガバナンスと社会的学習：環境省協働取組事業の経験に基づいて」 ・長尾 真文（国際開発センター）「アジア・アフリカ協力事業の評価：協働パートナーシップの可能性」 ・今田 克司（ブルーマーブルジャパン）「海国なき世界で求められる発展的評価とその SDGs 評価への応用としてのブルーマーブル評価」 ・工藤 尚悟（国際教養大学）「通域的な学び：異なる風土にある 主体が学び合う方法論の提案」 |
| ルーム C |
| <p>共通論題 10：第 6 期科学技術基本計画と評価学</p> <p>座長：白川展之</p> <ul style="list-style-type: none"> ・林隆之（政策研究大学院大学）「第 6 期科学技術イノベーション基本計画のモニタリングと評価（仮）」 ・村上裕一（北海道大学）「科学技術・イノベーション政策の政策過程・評価体制の国際比較（仮）」 ・野呂高樹（未来工学研究所政策調査分析センター）「科学技術・イノベーション政策のエビデンス・データとシンクタンク（仮）」 ・白川展之（新潟大学）「科学技術とイノベーションの評価研究と日本の評価学に求められる貢献（仮）」 |

VI 春の分科会の報告

例年春の研究会を開催してきましたが、日本評価学会ではこの時期の研究会に代えて、分科会の開催を奨励しています。2021年には以下の2つの分科会が開催されました。なお、2022年春の研究会の開催については、新型コロナウイルス感染症の動向に配慮しつつ、今年度と同様に実施する予定です。

【評価者倫理・スタンダード分科会】

2021年6月26日(土) 14:00-16:50 (Zoom)

第一部

- 14:00-14:10 開会の挨拶(代表者:長尾眞文)
14:10-15:10 小林信行『日本評価学会「評価倫理ガイドライン」の紹介と検討課題』

第二部

15:20-16:50 パネルディスカッション
パネリスト:小林信行、佐々木亮、中谷美南子

【社会実験分科会】

2021年7月3日(土) 10:00-15:45
テーマ:『エビデンスづくりとその活用:コロナ禍の影響を考える』

開会挨拶 佐々木亮(国際開発センター)

10:10-12:40 指定発表セッション

司会:田辺智子(国立国会図書館)

- 1 大前正嗣 葉山町政策財政部政策課『葉山町きれいな資源ステーション協働プロジェクト～住民協働によるランダム化比較実験とエビデンスに基づく政策決定～』
指定討論者 津田広和(特定非営利活動法人 Policy Garage)
- 2 中村俊裕(NPO法人コペルニク)『コペルニクが行う Lean Experimentation の紹介とコロナの影響～ゴムの木のレインハットなどを事例に～』
指定討論者 小林庸平(三菱UFJリサーチ&コンサルティング)
- 3 河野摂・田村愛弥(独立行政法人国際協力機構)『国際協力分野におけるコロナ禍のエビデンス

抽出の工夫--With コロナにおける国際協力プロジェクトマネジメントの一考察』

指定討論者 津富宏(静岡県立大学)

- 4 佐々木亮 国際開発センター(IDCJ)『コロナ禍における世帯サーベイの実施:「貧困アクションラボ」(J-PAL)の8つの知見とフィールド実践』
指定討論者 森俊郎(岐阜県養老町立笠郷小学校)

13:40-16:10 自由論題セッション

司会:佐々木亮(国際開発センター)

- 5 森脇大輔(株式会社サイバーエージェント)『デジタル技術を用いた公共政策と効果検証について』
指定討論者 砂山裕(総務省行政評価局)
- 6 松本佳子(医療経済研究機構)・吉田真季(埼玉県立大学研究開発センター)・渡部鉄兵(株式会社ウェルネス)・前村聡(日本経済新聞社)・埴岡健一(国際医療福祉大学大学院)『医療計画等のプログラム評価支援ツールの開発—脳卒中・心疾患分野のインパクト評価を推進—』
指定討論者 大島巖(東北福祉大学)
- 7 安藤如照(岡山県)・植竹香織(Policy Nudge Design)・竹林正樹(青森県立保健大学)『ナッジを活用したEメールの効果検証:クラスターランダム化比較試験』
指定討論者 齊藤貴浩(大阪大学)
- 8 森俊郎(岐阜県養老町立笠郷小学校)・合同会社メック・エビデンスに基づく教育研究会『エビデンスエコシステムの解明～アメリカWWCの事例から～』
指定討論者 田辺智子(国立国会図書館)

Ⅶ 書籍の紹介

山谷清志監修、源由理子・大島巖編『プログラム評価ハンドブック』(晃洋書房、2021年)

日本評価学会会員・明治大学 源由理子

はじめに、本稿は、執筆者のひとりとして、本書出版に込められた意図を含めた紹介文であることをご了承ください。

本書は、米国で発展してきた「プログラム評価 (Program Evaluation)」の基本的な考え方を紹介したものである。プログラム評価は、もともとは保健・医療・福祉・教育・コミュニティ開発などの領域における対人サービス・プログラムの質を高めるための方法論として発展してきた。日本においては近年、政策評価、行政評価、ODA 評価、NPO 評価など、多様な領域で活用されるようになってきた。本書の一義的な目的は、それらの現場でプログラム評価を適切に応用・活用してもらうために、その方法論の基本的な概念・考え方を紹介し、日本の評価人材の育成に資することである(現在、評価士養成講座のテキストとしても活用されている)。

本書は序論と、3部構成の本体から成る。方法論に先立つ序章「評価と評価学」では、評価理論の基本、日本における評価の歴史、評価の倫理と責任についての論者がまとめられている。第Ⅰ部では、「プログラム評価の基礎概念」として、その定義やプログラム評価の重要な概念・理論である評価の5階層とプログラムセオリーについて説明し、それらを踏まえた評価計画と評価デザインについてまとめている。続く第Ⅱ部では、プログラム評価の「評価手法・分析手法」について、プログラムの設計・開発、形成・改善ならびに介入後といったプログラム運営の段階ごとに、評価5階層の活用方法とデータ収集・分析方法を解説している。最後に第Ⅲ部では、日本

においてプログラム評価の考え方が適用され、あるいは既存の評価の補完として使われている現状を、業績測定、政策評価、ODA 事業評価、NPO 事業評価の4つの切り口からまとめてある。

多分野にまたがる応用社会科学としての「評価学」とは何か、が問われて久しい。本書の執筆はそれへの挑戦のひとつでもあったと筆者は考えている。本書の内容については、学会の出版・広報委員会(当時)のメンバーを中心に検討が重ねられた。各領域の評価の制度論についてはあえて触れずに、異なる出自の執筆者たちが横断的な方法論としての紹介を試みた。共通の認識としては、プログラム評価の特性である「計画段階からの体系的な評価をとおした柔軟なアプローチ」が、不確実性が高い、先が見えにくい現代における社会課題解決において果たす役割への期待ではなかったか。他方で、すぐに個別の領域で応用することが難しいという感想を抱かれた読者もいるかもしれない。今後は、各領域の制度・文脈の中でプログラム評価を効果的に活用していくための知見の蓄積と情報発信が求められるのではないだろうか。



VIII 評価の実践

「中学生による協働型プログラム評価の実践」

日本評価学会会員・東洋大学 米原あき

「私たちがやってきたこの方法を、ぜひ、生徒たちにもやらせてみたい」という相談を受けたのは、5 年ほど前から神戸の某中高一貫校で『ESD コラボ授業』の評価をお手伝いしてきた先生からだった。学習指導要領にも明確な位置づけの無い ESD、さらに理科と社会科が連携授業を行うという新たな挑戦——それを体系的に設計して評価するという試みに、当事者である先生方との協働で取り組んできた。その先生方が、1 年後の宿泊研修の企画とマネジメント、そして評価を、協働型プログラム評価を使って生徒たちに任せてみたいというのである。学校や市役所、あるいはアジアやアフリカの省庁や農村…これまでいろいろな場面でプログラム評価のワークショップ(WS)を行ってきたが、中学生を対象に、しかもオンラインで WS を行うというのは、私にとっても初の経験であった。

まず隗より始めよということで、学年担当、主任、主幹教諭、養護教諭の先生方と旅行代理店の担当者、計 10 名の方々が、プログラム評価の導入講義と宿泊研修のロジックモデル(LM)作成演習に参加して下さった。次に、宿泊研修の実行員会メンバー7 名が導入講義を受け、LM の作成に取り掛かった。「この宿泊研修の目的とは何だろう」「自分たちにしか実現できない研修ってどんな研修だろう」「『楽しい』宿泊研修の『楽しい』とはどういう意味なのか」生徒たちの議論はどんどん盛り上がり、LM は何度も練り直され、当初先生方が作成したものとはずいぶん異なる LM が完成した。後日、先生のお一人が、「これまでなんとなく前年踏襲で行っていた訪問先が無くなりました。生徒たちに『この活動は、どの目的にも寄与していない、意味のない活動だ』と指摘されまし

た。」と嬉しそうに苦笑されていたことが印象に残っている。

この研修旅行についての保護者説明会も、生徒たちの手によって行われた。生徒たちが作成した説明会資料には、『宿泊研修を成功させるには…正しい目的、目的と手段の整合性』という見出しと、『実現したい目的から逆算→その行動が、本当に目的に対して効果があったか検証できる』という囲みが記載されており、その先に自らが話し合いを重ねて作成した LM が掲載されていた。LM には、研修の運営に関する項目や、「行きたくない」と思っている参加者への対応、そして事前学習に関連する項目なども含まれており、これらが、上位目標『それぞれが何かを感じ、誇らしく思える宿泊研修』の実現を支えるロジックを構成している。ちなみに、「誇らしく思える」という概念の具体イメージは、「帰ってきたときにドヤ顔できる」ことだそうだ。

説明会において人前で LM を解説するという経験を経たのち、この LM をもとに評価調査を行うための指標策定と社会調査の WS を行った。保護者説明会で生徒たち自身が説明していた、「本当に目的に対して効果があったかを検証」するための準備である。LM に紐づいた指標は、生徒たちが作成した評価アンケートに反映され、研修の前後でデータ収集が行われ、さらに、質的・量的に収集されたデータは、研修終了後、理科や総合学習の教材となり、研修事後学習の一環として、生徒たちの手によって分析される…予定であった。残念ながらコロナ禍により、宿泊研修は延期となってしまったのだが、「どうなっても生徒はブレないだろうという変な自信があります。とりあえず観光にだけ行くなどの代替措置で乗

り切ろうと思わないのは、LMで研修の目標がはっきりしているからこそですね」という先生の言葉に、こちらがはっとさせられた。不確実な時代だからこそ、想定外の事態にも「ブレない」対応が取れるというのも、形成的な評価に期待される機能なのかもしれない。

当初、「中学生にプログラム評価ができるのか」などと考えたことは完全な杞憂に終わった。むしろ多くを学び、刺激を受けたのは評価者であるはずのこちらで、評価

の実践がもつ学習機能(エンパワメント機能)を再確認する機会となった。近年、教育学の世界では、非認知的な能力(社会情動的スキル Social Emotional Skills: SES)への関心が高まっている。OECDが定義するSESの涵養に、協働型プログラム評価の実践が寄与する余地は小さくなく、また、若い世代が評価的思考を身につける機会としても、教育現場におけるプログラム評価実践の意義は看過できないものがあるのではないだろうか。

「現場報告:質的調査の現場から～ザンビアで農家の声を聴く～」

日本評価学会会員・有限会社エムエム・サービス代表取締役社長、
グローバルな仲間たち主催、宮城大学客員教授 三好崇弘

「コメはやっぱり“香り”がするのが好き。香り米“スパ”が人気ね。ごはんを炊いてあの匂いがすると村中の人たちがあつまってくるの。」と照り付ける太陽の下でチテンゲ(女性の民族衣装の布)の裾を直しながらムソンダさん(仮名)は答えてくれた。ここはアフリカの東南部の大国ザンビア。日本の面積の2倍の国土の首都ルサカから車で8時間北上し、地方都市マンサから地方道路を1時間、そこから横道の未舗装の道を土ぼこりをあげながらさらに1時間ほど走ったところにある村、ムベンデ村の畑である。

藁ぶき屋根の素朴な家の前の大きな木の下で1時間ほど話をきいて、そこから歩いて20分ほどの畑で、彼女のコメ栽培について、立ち歩きながら話を聞いた。これまでのコメを作った経験や、種の種類をどう決めているのか、どう作付けし、草取りし、収穫し、袋詰めし、販売しているのか、なぜそのようなやり方をしているのか、じっくりと話を聞くと3時間はあっという間にたってしまう。

太陽の下で歩き話し疲れて彼女の家に戻ると、長女がチブク(メイズ=トウモロコシの発酵飲料)をふるまってくれた。甘酒のような色で、正直あまり好みではないが、「うまい!」といって飲み干す。(のが礼儀)家の中でムソンダさんの後ろをみると、メイズの製粉(ミルミル)の袋が山積みになっており、「やっぱりコメよりメイズが好き?」

ときくと、「そうね、メイズは私たちザンビア人のソウルフード(それなしにはいられない)だから・・・、でもコメが好きって



答えたほうがいいのかしら」と笑って答えてくれた。コメプロジェクトのインパクトを調べたいという私の意図を見透かされているようで恥ずかしかった。

これは筆者が、JICAがザンビア農業省と協力して推進している「コメ振興プロジェクト」のモニタリング調査の一コマである。2018年に1カ月の期間で農家のコメ栽培の実態を把握するための質的な調査をした。アンケートではなく、直接訪問して、観察とインタビューをして、コメ栽培の実態を把握しようとした。2週間という滞在期間で時間の許す限り、農家を直接訪問し、インタビューや観察による調査を実施、結果、27名の農家の声を集めた。移動するだけで時間がかかるため一日多くて4名、いつも2~3名で終了となる。3-4時間の滞在であるので、本当のことが把握できたかは不明であるが、アンケートだけでは見えない部分が見えてきた。

さまざまな発見を一言でまとめると「農家は賢い」。彼らはドナー(日本)からもらえるものは最大限活用し、無

料でもらった種を自分のできる範囲で賢く活用している。プロジェクトが推奨するネリカは、もらったから活用しており、他の品種でももらえるものはなんでもよい。

品種はネリカよりは、スパが人気(プロジェクトから見れば不都合な真実であるが)。入手した種は、果敢に試してみて、結果、継続したり、しなかったりと「評価」もしている。農法で種をばら撒く(Broad casting)という「専門家からみたら”ダメ”な農法」も、川の氾濫原の形状が毎年のように変わる地形では、ばら撒くことで、ルーレットの総がけと同じで、長期的には利益を一定にすることができる。「コメ専業農家」というものはなく、政府から価格保証がされているメイズを基盤にして栽培をし、余力の中でコメや野菜などへ広げ、たまに工事現場で働いたりしながら、多様な収入源を創出し、持続的な生き方をし

ていた。と思いきや、コメだけで儲けているコメ専業農家が最終日に見つかったりと、私が当初描こうとおもっていた「平均的な農家像」や思い込み(仮説)というものが、どんどん崩れていくことになった。

自分の思い込みが崩れていく感覚は当初は困惑と恐怖もあったが、毎日の質的調査があぶりだす、農家の真の姿に毎回で出会うことがだんだんとそれが快感になっていく。最終日には「今日はどんな発見があるのだろう」と、仕事であることも忘れてハイな状態でフィールドにウキウキと出かけていく自分がいた。

Monitoring Survey 2018: A Qualitative Approach

27 "Stories" of Rice Growing Farmers in Luapula Province, Zambia



IX 編集後記

日本評価学会学会報(ニューズレター)第1号をお届けします。この学会報(ニューズレター)は学会員の皆様に学会活動に関する様々な情報をお届けするのはもちろん、それ以外の多くの方々にも本学会について知り、その魅力をお伝えすることも目的としており、今後も定期的な発行を予定しています。

さて、記念すべき第1号は、巻頭言、理事会報告、第28期評価士養成講座のご報告、日本評価研究最新刊のご案内、第22回全国大会のお知らせ、春の分科会のご報告、書籍の紹介、評価の実践と盛りだくさんの内容です。本号に原稿をお寄せ頂きました皆様、お忙しいところご対応を頂きましてありがとうございました。お陰様で大変充実した内容で第1号をお届けすることができました。

日本評価学会出版・広報委員会ではこの学会報(ニューズレター)発行の準備と並行して学会ホームページに

ついてもより分かりやすく、より魅力が伝わりやすい内容に改訂するための見直し作業を行っています。また、第22回全国大会では日本評価学会研修委員会より「共通論題7(ラウンドテーブル)日本評価学会『評価士』制度のあり方に関する会員意見交換会」というセッションも企画されています。

このように各所で学会活動をより魅力的にするための取組みが進められております。例えば学会報(ニューズレター)についてはより充実した紙面になるように、お気づきの点や掲載すべき情報がありましたらご意見等をお寄せ頂き、評価士制度については第22回全国大会のセッションにご参加頂くなど、会員の皆様の引き続きの積極的なご参加を賜れば幸いです。

群馬医療福祉大学 新藤 健太
(出版・広報委員会委員)